
有栖キャロの小学校物語

b l u e o c e a n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有栖キャラの小学校物語

【Nコード】

N6362Y

【作者名】

blueocean

【あらすじ】

有栖零治に救われ家族に迎えられたキャラ・ル・ルシエ。家族に迎えられ、時期は秋に入る。そしてキャラは『有栖キャラ』として聖祥大学付属小学校へ入学する。

友達のルーテシア・アルピーノと一緒に転校したクラスはみんなからエローシユと呼ばれる男の子が中心となったちよつと変わったクラスだった。

これは魔法少女リリカルなのは 平凡な日常を望む転生者の番外編
です。

そちらを読まないといけないと思います。

ご了承を・・・・・・・・

第1話 今日から小学生になります（前書き）

こんにちはblueoceanです。

本編でキャラを出してからずっとやりたいと思ってました。

やれて後悔はない！！

それでは本編をどうぞ

第1話 今日から小学生になります

「キャラ、忘れ物ないですか？」

「大丈夫です、星お姉ちゃん。」

私は靴を履き終え、側に置いたバッグを背負いました。

「それじゃあ、レイ、フェリア、キャラを頼みますね。」

「ああ、誰一人キャラには触らせない。」

「フェリア、レイはダメそうなのでお願いします。」

「了解した……」

お兄ちゃん……

流石に恥ずかしいよ……

「わー！！もうこんな時間！？星、なんで起こしてくれなかったのさー！！」

ライお姉ちゃんが大声を上げながら星お姉ちゃんに文句を言っています。

「ちゃんと起こしました！！それでも起きなかったライが悪いんですー！！」

「そんなことより早く着替える。このままだと我らも遅刻するぞ！」

「わ、分かってるよ」

ライお姉ちゃんが慌てて部屋の中を行ったり来たりしてます。

「じゃあ、俺達は先に行くな。」

「はい、気を付けて・・・」

「キャラ、車には気をつけるんだぞ。」

「はい、行ってきます！」

そう言っで、私は元気よく玄関の外へ出ました。

ピンポン。

マンションの一階降りて、インターホンを鳴らしました。

「おはようございますー！」

「あら、おはようキャラちゃん。ルー、キャラちゃん来たわよ！」

ドアを開けてくれたのはゼストさん、挨拶してくれたのはルーち

やんのお母さん、メガー又さんです。

「おはよう、キャロ。」

「おはよう、ルーちゃん。」

「おはよう、フェリア、レイ。」

「ああ、おはよう。」

「おはよう。」

普通に朝の挨拶をしている様に見えますが、ルーちゃんの頭はボサボサです・・・

恐らく寝坊したのだと思います。

「ごめんなさいね、もう少しで準備終わるから・・・」

そう言つてメガー又さんはルーちゃんに声を掛けて、部屋の中へ入って行きました。

今日から学校なのに落ち着いてるな、ルーちゃん。

私なんて緊張して中々眠れなかったのに・・・

「キャロちゃん。」

「は、はい!」

「ルーテシアを頼む。のんびりしているから苦労すると思うが・・・」

「俺もいますし大丈夫ですよ。」

「零治、ルーテシアに手を出したら、地獄を見ろと思え・・・」

「だ、大丈夫ですから、デバイスしまつて・・・」

ゼストさんもすっかりお父さんですね。

「お待たせ」

「やっと来たか。ルー、ちゃんと行ってきますを言っただぞ。」

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

「気を付けてな。」

「行ってきます。」

こうして私達は学校に向かいました・・・

「キャラ、動きが固くなってるぞ・・・」

「は、はい!!」

うつつ、やっぱり緊張しちゃうな……

「ルー、そっちじゃない!!」

「……あれ？」

フェリアお姉ちゃんが慌ててルーちゃんに声をかけてました。
ルーちゃんは何故か左の小道に進んでいて、フェリアお姉ちゃんが
気がつかなかったら迷子になっていたと思います。

ルーちゃん、目を離したらすぐ何処かへ行っちゃうからな……

「ルー、私と手をつなごう。それなら問題ないだろう。」

「はい。」

「……それでは後はお願いします。」

「はい、分かりました。あなた達も中等部に遅れないようにね。」

「はい。じゃあキャロ、ルー、頑張れよ。」

「は、はい!!」

「ハッイ。」

「それじゃあ行くか。」

「ああ。」

そう言ってお兄ちゃんに行ってしまいました・・・

ちよつと不安だな・・・

「さて、まずは私の自己紹介ね。私はあなたたちのクラス、1 - 1の担任の細野霧子よ、よろしくね。」

「は、はい！よろしくお願いします!!」

「お願いします。」

細野霧子先生。

すごく綺麗で若い先生だけど優しそうだな。

「まずは軽く校内の説明ね。一年生の教室は・・・。」

そこから先生の校内の説明が始まりました。

「まあ緊張しないで、クラスのみんなは・・・変わってるけど、友達思いのいい子達ばかりよ。」

「は、はあ・・・」

随分間があっただけど、変わってるってなんだろう？

「ルーちゃんは大丈夫？」

「ルーは大丈夫。キャロはルーが守る。」

「中には敵なんていませんから大丈夫よ。取り敢えず私が呼んだら入ってきてね。」

そう言つて、先生は教室に入って行きました。

「キャロ。」

「何？」

「友達一杯作ろうね。」

「そうだね！！」

『今日は新しく皆さんの友達になる子がいます。』

『うおおおお！！ようやく俺にも嫁が！！』

『・・・既に女の子と思ってるあなたの将来を心配するわ。』

『先生の言葉じゃない！！』

『うるさいわよエローシュ。』

『俺は江口伸也！！エローシュちゃんわ！！』

『はいはい、エローシュ君、静かにね。』

『エローシュちゃん！』

・・・既に盛り上がってますね。

『先生、どんな子ですか？』

『二人共可愛い女の子よ。』

『・・・片方はピンクの髪の子、もう片方は紫の長い髪の子。』

『・・・小岩井君、正解だけど、どうして知ってるの？』

『・・・僕に不可能の2文字は無い。』

『3文字ね、全く、また職員室で盗撮したでしょう・・・』

『そんな事実はない？』

『なぜ疑問形なの？』

『先生、岩つちは悪くない、俺達男子は先生の際どいアングルを撮りたかっただけなんだ！！』

『かばってるようだけど、他の男子にも飛び火してるわよ。』

『そつだぞ、黙れエローシュー!!』

『しゃべりすぎだぞ、アホエローシュー!!』

『変態!!エロガキ!!だからエローシュって呼ばれてるのよ!!』

『ふっざけるな!!勝手に変なあだ名つけたのかと思えば、今度はエロいからだと・・・あれ?ベストマッチじゃね?』

『・・・もはや変更しようがない。』

『あきらめるな親友、何かあるはずだ!何か・・・』

いつになったら中に入れるのでしょうか・・・

『もういいから一旦静かに!!これ以上転校生を待たせちゃいけないじゃない。それじゃあ2人とも入って。』

と、とうとうこの時が・・・

ま、また緊張してきた・・・

「行こう、キャロ。」

「は、はい!」

私達は教室に入りました。

「は、はじましゅて、あ、有栖キヤ、キヤロでしゅ！」

パチパチパチ！！

皆さんが暖かい拍手を・・・

って何かが違う気がする！

「キヤロちゃん可愛い〜俺と結婚してくれ〜！」

「黙れ変態エローシユ！！！」

「やかましいから夏穂は黙ってる！」

け、結婚って・・・

私はお兄ちゃんに・・・

「ルーテシア・アルピーノです。もしかしたらグランガイツになるかもです。」

ええっー！？聞いてないよー！？

「確かに仲がよかったけれど、それほどだったの！？」

「結婚式のときは是非来て。」

「うん！今日の内にお兄ちゃんに言っておくね！」

よかった、今日はすぐ帰ったらみんなに報告しなきゃ！

「あのね、二人とも・・・」

「はい？」

「歓迎しようとしてたあの子どもがかわいそうだから、後にしてもらっていい？」

「あつ。」

みんなを見てみると気まずそうに手を下ろす人がしばしば。

恐らく拍手してくれるつもりだったんだと思う。

何かごめんなさい・・・

「さあ、質問タイムよ。好きな質問をどうぞ。」

「はい！」

「はい、花井さん。」

「好きな食べ物は何ですか？」

好きな食べ物ですか？

えつと・・・

「私はシチューです。」

「ルーはハンバーグ。」

「俺はまさかのカツオのカルパッチョ!!」

「いや、聞いてないから……」

「ていうかエローシュ君？それって居酒屋のメニューじゃないのかな？」

「いやいやいや、こんな子供がウォッカやテキーラやほろ〇いを飲めるわけじゃないですか」

「……詳しい。」

「むしろ飲んででしょ？」

「そ、そんなことねえよ夏穂。ほろ〇いなんかはジュースと変わらないかと思ってないから!!」

「……エローシュは黙ったほうがいい。」

「エローシュじゃないし!」

「アンタね……どうせおじさまのせいでしょうけど、この年でアル中何て話にならないわよ……」

「大丈夫、基本ほろ〇い一本しか飲まないから。」

「飲んでる事に問題があるのよ。」

女の子に怒られて静かになると思いきや、今度は3人で口論し始めました。

私達蚊帳の外……

隣のルーちゃんも流石に気まずそう……

「ほら、その仲良し3人、転校生が蚊帳の外だから、少し静かにしてなさい。」

「……はい……」

さつきからあの3人ばかりが喋ってるような気がするなあ……

「ごめんなさいね、あの3人は幼稚園の前からずっと一緒にいたいで仲がいいのよ……」

「そうだぜ！俺は江口伸也！」

「またの名をエローシュ……」

「そうエロ……って違う!!」

「あんたらね……私は千歳夏穂よ、よろしく。」

「……小岩井佐助。」

「はい、よろしくお願いします!!」

「よろしくお願いします。」

少し変わってるけど、仲良く出来ると思う。

「まあ困った時は俺に相談してくれ。一応俺がこのクラスのリーダーだからさ。」

「……江口君がリーダー？」

ルーテシアちゃんもそう思ったみたいで微妙な顔をしています。

声に出さなかった私達は偉いと思いますけど。

「……そうだよ、どうせ俺なんかがリーダーできるわけ無いって思ったんだよな。分かるよ、どうせ俺なんてみんなからエローシュって呼ばれる変態だし、女の子にもモテないしな……」

あれ？凄く自分を攻め出しましたが、どうしたんでしょう？

「……エローシュはナイーブ。」

「勝手に復活するから気にしないでいいわよ。」

「そうですか……？」

少し不安でしたが、千歳さんに言われた通りに気にしない事にしました。

「あまり対した質問でしなかつたけど、後は自分達でね。二人は窓側の空いてる席を使つて。今日は歓迎会という意味も込めて、この後学校案内とレクをするからみんなそのつもりでね。」

そう聞いたクラスみんなは一斉に盛り上がった。
さっきまでブルーだった江口君も混ざってる。

レクってレクリエーションの事かな？

そんな事より、私は始めこそ緊張していたけど、いつのまにか普段の私でいることに気がつきました。

このクラスの雰囲気緊張も吹っ飛んでいたみたいです。

お兄ちゃん、学校って楽しい所ですね。

第1話 今日から小学生になります（後書き）

基本、あの3人とキャラ、ルーテシアと後で出るもう一人の女の子をメインで進みます。

更新スピードは本編と同じスピードでやりたいんですけど、本編中心で更新しようと思います。

次は学校案内、レクです。

・ 恐らく本編と同じ様に誤字、脱字が多いと思うので、ご了承ください・・・

これからよろしく願います。

第2話 どろけいは警察と泥棒の戦争です（前書き）

こんにちはblueoceanです。

本編と同じスピードと思ってましたが、3時間位で書き終わってしまいました。

やはり最初は速く書き終わるな・・・

それではどうぞ・・・

男子の殆どが血の涙を流してる。

そう言えば、お兄ちゃんも星お姉ちゃんからエロ本没収されてものすごく泣いていたけど……

「ゼストもエロ本取られて泣いていた……」

「エロ本ってどんな内容なんだろうね？」

エッチな内容だっていうのは分かるけどな……

私とルーちゃんは首をかしげてその光景を見ました。

「ここはプール！！そして今年の夏、先生のスク水は素晴らしかった！！相棒！！焼き増しはすんでるか？」

「……問題ない。」

「じゃあ一枚500円。」何だと！？ちくしょう！！今週はモンポケのカードを買ったために貯めていたのに……お金は……」

「小岩井君、その写真没収です。」

「なん……だと！？」

当たり前だと思えます。

「ここが我が小学校で有名な聖堂！！でもぶっちゃけ要らないと思う。」

「エローシュ、それはないんじゃない？」

「エローシュ言っな！！」

「ここで全校集会をやったり、公演を開いたりします。」

「大きいですね〜」

「広い〜」

「二人共聞いて！？」

「……」

「ここは屋上。一応開けているけど、間違っても柵を登ったりしないでね。基本的にはお弁当を食べたりするのにここを使ってるわ。」

「なるほど〜」

「……」

「えっと・・・・・・・・どうする？」

「どろけいってなんだろう・・・」

そう言えばそれはお兄ちゃん達から聞いたことが無いなあ・・・

ドッジボールの事は星お姉ちゃんから詳しく聞いてるけど・・・

「それじゃあどろけいで。」

「分かった、どろけいね。みんなー！どろけいしますよー」

凄く楽しみです。

「ルールを説明しよう！！ルールは簡単！！警察が泥棒を捕まえる。それだけだ！！」

「違うでしょ・・・捕まっても、檻にいる泥棒をタッチすればまた逃げられるの。制限時間までに全員捕まえれば警察の勝ち。逃げ切れれば泥棒の勝ち。あつ、ちなみに校内に入っちゃ駄目だからね。」

なるほど・・・

「それじゃあ警察と泥棒に別れましょうか。」

先生の一声で私達はそれぞれ別れました。

警察

千歳、ルーテシア、e t c（クラスの3分の1）・・・

泥棒

エローシュ、小岩井、キャロ、e t c（クラスの3分の2）・・・

「諸君、作戦を説明する！！」

校舎裏にある物置小屋裏で、泥棒のみんなが集まっています。
ちよつと狭いけど、我慢しよう。

「各自逃げるのは複数で逃げる。捕まっても救出に一人で行くことを禁止する！片方が捕まった場合は誰か別の組と行動するように！」

そう言われて、男の子一人が手を上げる。

「エロ隊長、どういうことでしょうか？」

「エロ隊長はやめてくれ！内容は簡単だ、単独で助けようとしても

返り討ちにあっただけだからだ！」

次に別の男の子が手を上げた。

「ですが、少数になった場合はどうしますか？」

「その時はこの忍者の末裔佐助がみんなをパパッと助ける。だから無理して救助に当たらなくていい。」

「任せろ……。」

サムズアップして宣言する小岩井君。
凄く自信があるみたいです。

「よし、それじゃあ、最後まで生き残って勝利の美酒を飲もうじゃないか……！」

エローシュ君がそう宣言して泥棒のみんなは散らばりました。

「なるべく見つからないように……。」

私はハッキリ言って運動が苦手です。
と言っても家の皆さんが運動神経が良いだけなのかもしれませんけど……。

あつ、ちなみにルーちゃんは運動神経良いです。

アジトで走り回って速くなったって言っていましたけど……

羨ましいです……

そんなわけで私はブランコ裏の茂みに身を潜めています。

隠れるのは得意です!!

「有栖、ここにいたのか。」

「あつ、エローシュ君。」

「エローシュちゃんわ!……でみんなどうだ？」

「うまく逃げているみたいだよ。」

2人で基本動いているので、追いかけても分断するってやり方でうまく逃げています。

足の速さもそこまで違いがないみたいで、警察が迷ってるうちに逃げ切っています。

「よし、これで捕まっても、相棒の影の薄いスキルシャドーがあれば捕まった奴らも逃がせる筈……」

「小岩井君逮捕!!」

「はあああああ!？」

エローシュ君、立ち上がって凄い大声でビックリしました。それほど予想外だったのでしょう……

「……おかげで隠れてるのがバレました。」

「……済まない、油断した。」

「一体何があつたんだ!？」

「佐助は校庭に落ちているエロ本に食いついたわ。単純ね。」

そう言つて千歳さんが勝ち誇つた顔をしています。

「くつ、だが逮捕される価値はあつた。」

「夏穂!!俺の分は？」

「必要ないでしょ、エローシユは運動神経並みだから。」

「ガッデム!!」

頭を抑えて大きなアクションを取りました。

「くそつ、なぜ俺にはオリ主特典がないんだ!!あの見習い神が憎い!!」

何を言つてるのかさっぱりですが、取り敢えず、神様に八つ当たりしてることだけは分かりました。

「みんな、あそこにエローシユがいるから!エローシユさえ捕まえれば、勝つたも同然よ!」

「おっ！」「！」

「！！」

追いかけていた警察が一気にこっちに來ます！

「有栖、逃げるぞ!!」

「はい！」

私はエローシュ君とその場から離れました。

「エローシュ君、こっちは？」

「だ、駄目だ！視界の悪い所はいきなり現れて逮捕って事もありえる！」

そう言うてるエローシュ君ですが、ハッキリ言って私より足が遅いです。

ですが、まだ逃げ切ってる所を見るとクラスのみんなより足が遅いって訳でもないみたいです。

「つて言うか……有栖……速い……」

「エローシュ君、息切れ早い!!」

スピードも落ちてきました。

このままじゃまずいです・・・

「・・・・・・・・有栖。」

エローシュ君はいきなり逃げるのを止めました。

「どうしたのですか？逃げないと捕まってしまうですよ!!」

「・・・・・・・・俺を置いて早く逃げろ、ここは俺が抑える。」

「なっ、何を言って・・・」

「いいから!!このままじゃどのみち二人共捕まってしまう!!有栖、お前は俺より足が速いんだ。俺が抑えている内に早く逃げろ!!」

「でも・・・・・・・・」

「有栖!!!!俺の屍を超えて行け!!」

「!!エローシュ君・・・・・・・・ごめん!!」

私はエローシュ君を置いて一人で逃げました。

「ごめんなさい、あなたの犠牲は無駄にしないから!!」

「ああ、泥棒の仲間を頼む!!!!・・・さてお前ら。」

エローシュは警察の前に仁王立ちになって立ち塞がった。
その体からは威圧感が漂っている。

「ここから先は行かせねえ!!!」

エローシュの咆哮は警察を怖気付かせた。

「この先には俺の好きな女がいるんだ!!!死んでも通すか!!!」

エローシュの覚悟は強烈で他を圧倒している。

「どうした、怖気付いたか？俺は全員でかかってきてもいいんだぜ？ただし……」

「覚悟のある奴だけ「タッチ」……」

エローシュの肩にはルーテシアの手が乗っていた。

「エローシュ、確保。みんな、キャロは結構足が速いから複数で追いかけて。」

「「「「「了解!」」」」」

ルーテシアの指示の元、他の警察が動き出した。

「あの……アルピーノさん？」

「どうしたの？泥棒は余計な事は喋らない。」

「空気読んでくれないんですか？」

「長くなりそうだし、ありきたり。」

「ダメだしされた!？」

「はあはあ……」

キャロです。

残りの泥棒もあと僅かになりました……

それを見て警察は檻の守りを少なくして、泥棒を捕まえに行っています。

ハッキリ言ってピンチです。

ですが……

「これはピンチでありチャンスです……」

里から追い出されてから培ってきた隠れる能力。これを活かす時が来ました。

「確かこうして……」

ライお姉ちゃんが言っていました。

『有名な傭兵はダンボールに身を潜めるんだって。』

確かにライお姉ちゃんがやっていたゲームのおじさんはダンボールに身を潜めて敵のアジトに侵入してました。

そして運がいいことに、ダンボールも始めにいた小屋の脇にありました。

「よし、準備完了です!」

檻は花壇に囲まれた旗の棒が立っているコンクリートのスペース。

目標に向かって、私は行動に移りました。

「なあ相棒、エロ本は？」

「没収された……」

「あ、いや、ドンマイ。」

「エローシュこそ……」

「くっ……」

エローシュ君、エロ本見たさに捕まった訳ではないですよね？

ピタッ。

「あれ？こんな所にダンボールあったっけ？」

「用務員のおじさんが置いていったんじゃないの？」

そう言つて男の子2人組は行きました。

どうやらやり過ごせたようです・・・

ゆつくりと、音を出さないように・・・

「あと、誰が捕まつてない？」

「有栖ちゃんがまだ〜！！」

「恐らく隠れてると思うから念入りに探して！」

「分かつた〜！」

恐らく千歳さんが指示を送ったんだと思う。

けれど、これで警察の人数も更に減りました。

チャンスだ。

「ルーちゃん、有栖ちゃんがどこにいるか分からない？」

「うつん、キャロって私よりは足は速くないんだけど・・・」

まだあの二人にはバレていない。

距離ももう少し。このまま進めば・・・

「ん？ダンボール？」

「結構汚い・・・」

「えっ！？どれ？」

何でエローシュ君と小岩井君が反応するの！？

これじゃあバレちゃうー！

「・・・怪しい。」

ルーちゃんがそう言って近づいてくる。

こうなつたないちかばちか・・・

「・・・それ！」

サッと立ち上がって、かぶってたダンボールをルーちゃんに投げました。

「くっ・・・」

ルーちゃんも動きが少し止まりました。

「しまった!!」

もう遅いです！！

千歳ちゃんの距離だったら、捕まる前に泥棒を逃がせます！！

「私達の……勝ちです!!」

そう言いながら一番近くにいたエローシュ君にタッチしました。

「どろけい、警察チームの勝ち〜!!」

[illegible]

ううっ、負けてしまいました・・・

あの後、決死の思いで泥棒を逃がしたのですが、半数以上が千歳ちやんとルーちゃんの前に逮捕。

逃げたみんなも帰ってきた警察に逮捕されて、直ぐに全員捕まってしまうした。

私ですか？

疲れていた上に、ルーちゃんに追いかけられたら勝てません……

キンコーンカーンコーン……

「はい、チャイムがなったのでここまで。教室に帰って、帰りの会するわよ。」

「「「「「「「「はい！」「」「」「」「」

みんなが反応して下駄箱に向かいます。

「あゝ、ちくしょう。有栖ちゃんのおかげで逃げられたのに……」

「夏穂のバカ体力には驚く。」

「うるさいわね、別にいいじゃない……」

確かに千歳ちゃんはルーちゃんに負けないくらいの速さでみんなを捕まえていました。

「それにしても2人は運動得意なのね。」

「そうだな、それに有栖のダンボールにはマジでビックリしたぜ！」

「僕も驚いた……」

「私も……」

「えへへ、お姉ちゃんのゲームを見て、思い出したんだ。それと私の事はキャラでいいよ。」

「そうか、なら俺は「エローシュ。」そうエローシュで・・・って佐助！！」

「もう諦めろ。」

「そうね、佐助の言うとおりかも。」

「そんな現実みとめねえ！！そんな幻想俺がぶち壊してやる！！」

「うん無理。」

「無理。」

「無理だね。」

「無理ですね。」

「くそ・・・みんな大嫌いだよ！！！」

泣きながらどこかへ走って行ってしまいました。

「いいんですかね？」

「いいのよいつものことだから。」

「そうだ、気にするだけ仕方ない。それと僕は佐助でいい。」

「なら私も夏穂でいいわよ。」

「ならルーもルーでいい。」

「はい!! 皆さん、これからよろしくお願いします!!」

お兄ちゃん、早速、お友達ができましたよ!!

第2話 どろけいは警察と泥棒の戦争です（後書き）

とこんな感じで3人と友達になりました。

次はメインとなるもう一人の女の子の話にしたいと思います。

それが終わったらオリキャラ紹介したいと思います。

次は本編の方を中心に書こうと思いますが、こっちがまた早く書き終わったら投稿しようと思います。

次もよろしく願います！

第3話 1年1組はとっても良いクラスです（前書き）

こんにちはblueoceanです。

今回最後のメインキャラが出ますが、話のメインはエローシュです。

それではどうぞ……

第3話 1年1組はとっても良いクラスです

さて、私が小学校に入って3日経ちました。

クラスのみんなとも仲良くなれて、毎日がとても楽しいです!!

「さあ皆さん、今日は昨日あった事を作文で書いてみてください。枚数は自由でいいですけど、最低1枚は書いてくださいね。」

国語の授業、私はハッキリ言って苦手です。

算数と英語は得意なんですけど・・・

「ルーちゃん。」

「何？」

「作文・・・得意？」

「苦手。」

やっぱり・・・

私達はひらがなを覚えたばかりですし、漢字もまだ完璧には覚えていません。

「取り敢えずやれるだけやろう。」

「そうですね。」

私は作文に集中しました。

20分後・・・・・・・・

「出来たああああ!!」

いきなり的大声にクラスのみんながビックリしました。

どうやら声の主はエローシュ君みたいです。

「先生、どお？」

「まだ読んでないわよ・・・」

呆れながら先生は作文に目を通し始めました。

「・・・・・・・・まあいいでしょう。しかしよく難しい漢字知ってるわねエローシュ君。」

「エローシュちゃいます！俺ってこんなだけ勉強好きで幼稚園の頃から天才で名が通ってたから。」

うわっ、先生凄く驚いた顔をしています。

「何でそんな顔!？」

「だって、自分から天才って言うなんてね・・・・・・・・」

「そつち！？それと痛い子を見るような目で見ないで！！時々先生は俺の事をいじめてるのかと思っちゃうよ！！」

「・・・・・・・・・・」

「反論しないの！？」

まあ先生があんな態度を取るのはエローシュ君だけだろうな・・・

「いいから、後は寝るなりボーツとするなり好きになさい。だけどこの教室から出るのだけは駄目よ。」

「うーっす。」

そう言つてエローシュ君は自分の席に戻つて寝始めました。

「エローシュ君凄いね。」

「私負けない、キャロは私の物。」

ちよつと怖いんだけどルーちゃん・・・・・・・・

「昼飯タイム！！！」

今いるのは中庭。

ここで5人で円を書いてお弁当を食べています。

「ちょうどいい気候ね。気持ち良いわ。」

「そうですね、昨日は曇ってたので今日は特にそう思います。」

そう言いながら私はお弁当を取り出しました。

「今日も星姉？」

「うん、そうだよ。本当はお兄ちゃんを作るって言っただけで、『お弁当は私が作ります！』レイは邪魔しないでください』ってお兄ちゃん追い出されてた。」

「やっぱり星姉は強い。」

私もそう思います。

「ねえキャロ、話に出るお兄ちゃんは一人だとして、お姉ちゃんは何人いるの？」

「えっと……4人だよ。」

「えっと、そうなると8人家族？」

「8人？家には6人しかいないよ。」

「えっ、それって……」

「そう、私の家には親がいないの。」

そう聞くと、申し訳無さそうな顔をする夏穂ちゃん。

そんな顔、友達にしてほしくないなあ。

「そんな顔しないで。私は今とっても幸せだし、何よりみんなに会えたから。」

「キャラ・・・」

「素晴らしい・・・」

「いい子や！」

「エローシュにキャラは渡さない。」

「フハハハ、私は欲しいものは必ず手に入れる！例え・・・あつ、ルーさん、俺のおかずそれ以上食べられるとご飯しか残らないのですが・・・」

「この世は弱肉強食、悔しかったら強くなれ。」

「じゃあ、私はソーセージ。」

「僕は、グラタン。」

「あつ、なら私は卵焼きをもらいます。」

「あああああ！？俺のおかずがあああ！！」

この世は弱肉強食です、エローシュ君。

あつ、卵焼き美味しいです。

「や、やめてください!」

「うるせえ!! いいからよこせ!!」

昼食後、トイレに行った帰り道、男の子の怒声が聞こえてきました。

私は声のした方へ行くと、そこでは一人の女の子が4年生位の男の子5人組に囲まれていました。

「か、返して!」

「見ろよ!こいつ生意気に高そうな宝石持ってるぜ!!」

「本当だ!すごい高そう!」

「お願いします、返してください・・・」

「へん、俺にぶつかった罰だ。これは俺が没収する。」

「!?返して!!」

「うるせえな!!」

そう言っ腕をつかんできた女の子を突き飛ばしました。

上級生なのに!!

「何してるんですか!？」

私は注意しようと走って行きましたが、

「おい、これ以上は面倒だ行こうぜ。」

そう言って男の子は行ってしまいました。

くっ、顔が見えなかった・・・

「大丈夫ですか？」

「ぐすつ・・・えつぐ・・・有栖さん？」

「真白さん？」

絡まれていた女の子は真白雫さん。
私のクラスメイトでした。

いつも物静かで少しみんなから距離を置いているような子だったので、話すのは今回が初めてです。

「どうしたんですか？」

「私の大切な物を取られちゃって・・・」

「大切なもの？」

「蒼色の宝石・・・」

そう言えば宝石がどうか・・・

「どうしよう・・・あれがないと・・・」

目に涙を一杯に貯めて泣きそうになってます。

手伝ってあげたいけどどうしよう・・・

「どうしたんだ!？」

そんなとき、慌てた様子でエローシュ君がこっちにやって来ました。
・・・

「・・・なんのつもり？」

五時間目の授業をしにきた細野先生が言いました。

教卓にはエローシュ君が立っています。

「先生ごめん、今から大事な話があるんだ。少し時間を貸してくれ。」

いつもとは違う雰囲気のエローシュ君に私とルーちゃんは驚いてます。

「みんな聞いてくれ！！さっきの昼休みに俺達クラスの仲間、真白ちゃんが上級生の男の子5人組相手にいじめにあっていた。その時真白ちゃんの大切なものがその男5人組に取られた。これは俺たち1年1組に対しての宣戦布告だ！！俺は断じてクラスの仲間をいじめたやつを許せない！！だからみんな、俺と真白ちゃんに協力してくれ！！」

エローシュ君はみんなに頭を下げてお願いしています。

何かかつこいいです。

「・・・何水臭いこと言ってるんだよ。」

「そうだが、同じエロ紳士同盟の仲間じゃないか。」

「それにエローシュ君に振り回されるのはいつものことだしね。」

「私もこのクラスのためなら力を貸すよ！」

男の子も女の子もみんな賛同します。

こんなにエローシュ君は信頼されているんだ・・・

ただのエッチな変態さんじゃなかった。

「ありがとう、みんな。・・・それじゃあ次の休み時間に作戦を・・・」

「いいわよ、このまま続けなさい。」

「先生！？」

「本当は私が行きたいくらいだけど、あなたが行くって言うなら私はそっちを尊重するわ。思いつきりやりなさい！後のことは全部先生に任せてね。」

「ありがとう先生、大好きだ！！」

そう先生に言っ、再びみんなの方へ向く。

「さあ、みんな、作戦会議を始めよう。」

エローシュ君による作戦会議が始まった……

放課後……

今、私達は4年3組の前にいます。

人数はクラスの半分の男の子と女の子。

先生にお願いして、帰りの会を短縮。

4年3組が終わるよりも速く、こっちに來て待ち伏せています。

『勝負はあっちの担任が職員室に戻る前までに話をつけて、返してもらっ。』

これが今回の作戦目的です。

佐助くんの調べだと、宝石を奪った男の子の親がPTAの役員らしく、しかもモンスターペアレントらしいです。

PTAとモンスターペアレントは意味が分かりませんが、エロシユ君と夏穂ちゃん、先生に佐助くんは険しい顔つきになっていました。

何か良くない要因なんだと思います。

「よし終わったぞ！」

4年3組のクラスの中が騒がしくなってきました。
どうやら帰りの会が終わったようです。

「よし、夏穂班、先生を確保！話が終わるまで絶対に教室から出さな！」

「了解！！」

「よしエローシュ班、今からターゲットに接触する!!」

了解、武運を祈る。

エローシュ君は耳に付けている小型マイクで佐助君に言いました。

佐助君は今は一入別行動しています。

何をしてるかは先生と夏穂ちゃんしか知りませんが……何でも特別任務らしいです。

「行くぞ、みんな！！」

私達は4年3組の中に入りました。

「何だお前ら!!」

教室の窓側、そこに5人組の男の子がいました。

「真白ちゃん、あいつら?」

「う、うん、間違いない・・・」

真白ちゃんは少し震えながら答えます。

「そうか。おい、よくも昼休みは俺のクラスの仲間をいじめてくれたな!」

エローシュ君はわざといじめたって所を強調しました。

「おい、一体何を言ってるんだ?どこに証拠がある?」

「」「」「そうだ、そうだ!」「」「」

「この子がお前らを見ている。」

「本当に俺か？お前は実際に見たのか？」

余裕の表情でリーダーの男の子が言いました。

「そう言うだろうと思ってたさ。だかな、お前らは一つミスをした。確かにいじめただけだと証拠を立証するのは難しい。だって誰も見ていなかったんだから。だけどな……」

エローシュ君は一旦切って、名探偵みたいにリーダーの男の子に指を指しました。

「お前は真白ちゃんの大事なものを奪った。……言わなくても分かるな？」

5人組はしまったって顔をしています。

「俺達の要求は2つだ。1つ目はそれを真白ちゃんに返して謝る。2つ目は俺達1年1組に一生関わらないだ。そうすれば今回は見逃す。……どうする？」

「な、何を勝手な事を言ってる！！俺たちが持つてるとは限らないだろ！！」

「だったら荷物を調べてもいいだろ？もちろん服のポケットやロッカーの中も念入りにな。」

「クソっ……」

「ど、どうする？」

「す、素直に返した方がいいんじゃないの？」

「だ、大輝君……」

「うつ、うるせえ！このままガキに舐められたまままでたまるか！！」

そう言つて大輝と呼ばれた男の子がポケットから、真白ちゃんの大切な蒼い宝石を取り出しました。

「あっ！？」

「返すのか？」

「ああ……って素直にするかよ！！」

そう言つて窓から宝石を思いっきり投げました！！

「ああ！！」

「くはははははは、ざまあみろ！！これで証拠も無くなった！！俺がその女をいじめた証拠は完全になくなったんだよ！！ほらどうする？どうやって俺のやったことだつて証明する？お前らの負けだ！！」

大笑いしながら大輝と呼ばれた男の子は言いました。

「狂ったか？俺達以外にも証人はいるんだぞ？」

「お前たちこそ甘い！俺の親はPTAの役員だ。それも上位のな。このクラスの先生含め、誰も俺に逆らえない！！」

そ、そんな！！

私は夏穂ちゃん達が確保している先生を見ると、夏穂ちゃんたちが止めているのを振り切って、教室から出ていました。

「さて、形勢逆転だな。どうする？全員で土下座したらそのクソガキ以外は許してやってもいいぜ。」

エローシュ君を指さして言いました。

どうするのエローシュ君？

「おい、どうした？せっかくチャンスを上げてるのに、不意にするつもりか？」

勝ち誇った顔でみんなに言います。

悔しい……何でこんな奴が……

どうしよう、お兄ちゃん……

「おいどうするんだよ！！いい加減にしないと全員しめるぞ！！」

『準備OKだ。』

「……………了解した。」

エローシュ君？

「さて、もういい加減終わりにするか。これ以上付き合ってもらうのも悪いしな。」

いきなりエローシユ君がそんな事を言い始めました。

「何だ？いきなり壊れたか？」

「今、何時だ？」

えつとちようど4時ですけど・・・

「先生の話は聞いているかい？先輩。今日はこの学校でPTAの会議をするみたいだぜ。ちようど4時から。」

「一体何を言ってるんだ？」

「黙ってな、直ぐに分かる。・・・佐助、やってくれ。」

『了解。』

そう言つと、教室にあるスピーカーから音が流れ始めました。

『くはははははは、ざまあみろ！！これで証拠も無くなった！！俺がその女をいじめた証拠は完全になくなったんだよ！！ほらどうする？どうやって俺のやったことだって証明する？お前らの負けだよ！！』

「何だこれ！？」

放送でさっきの話が流れて来ました。

「これなーんだ？」

そう言って取り出したのは何かの機械です。
あれって・・・

「もしかして盗聴器？」

「キャロちゃん正解。」

なんでそんなものが・・・

「しかし、こいつは本当にバカだったな！！好き勝手にペラペラ話してくれたおかげで証拠はバッチリ取れた。いい仕事だぜ相棒！！」

『これくらい問題ない・・・』

放送を流してるのは佐助君か！！

「さて、もうお前に逃げ場はないぜ。俺達以外に先生もあんたの親もこれを聞いてるだろうな。」

「くっくっく・・・」

「精々親への言い訳を考えておくんだな。お馬鹿さんな先輩。」

「くそおおおおお！！」

相手は怒りに身を任せてエローシュ君に殴りかかって来ました！！

「エローシュ君！！」

だけど、その拳はエローシュ君に届く事はありませんでした。

「ぐあつ!!」

夏穂ちゃんが自分より大きい相手をぶん投げていました。

「私、家が合気道の道場やってるのよ。アンタみたいな屑野郎をぶちのめす為にね。」

夏穂ちゃん言葉遣いが……

「サンキュー夏穂。さて、俺達はクソでバカな先輩が投げた真白ちゃんの大事なものを取りに行きますか。」

「でも、宝石は……」

投げ捨てられちゃって……

「問題無いさ。取り敢えず下に行こうぜ。」

そう言つてエローシュ君はみんなに下へ行くように指示を出します。

「馬鹿な奴だな、せっかく穩便に済ませてやろうと思ったのに……精々、自分の罪を悔やんでな。」

そう言い残して、エローシュ君も教室を出ました。

「エローシュ。」

下に行くとルーちゃんと上に居なかったクラスメイトがいました。

みんな泥だらけです。

「お疲れ、それで見つかった？」

「これ？」

そう言つてルーちゃんは蒼い宝石を見せました。

「これです！！本当に良かった……」

真白ちゃんは大事そうに宝石を握りしめています。

「本当にありがとう。」

「気にしないで。それとエローシュ、かつこよかったよ。」

そう言つてルーちゃんはエローシュ君の頭を撫でました。

エローシュ君は恥ずかしそうにされるがままになっています。

「けどすっかり汚れちゃったから、みんなにジューズね。」

「鬼ですか！？ルー様！！」

そのやりとりを見てみんなで笑い合いました。

「本当にみなさんありがとうございます！」

真白ちゃんはもう一度、頭を深々と下げ、みんなにお礼を言っています。

「何言ってるんだよ、真白ちゃんもクラスの仲間なんだ。気にすることないよ。」

真白ちゃんの頭を撫でながらエローシュ君が言いました。

「さて、相棒が帰ってきたらみんなで帰るか！あつ、それと……」

そこでエローシュ君が一旦話を切って、

「ミッションコンプリートだ！みんな、お疲れさま！」

その一声にクラスメイトみんなで返事をしました。

私、このクラスの一員になれて本当に良かったです！！

第3話 1年1組はとっても良いクラスです（後書き）

今回出た真白雫ちゃんが最後のメインのオリキャラです。

基本、オリキャラ4人とキャラQ、ルーちゃんが進んで行くと思います。

次はオリキャラの説明です。

それと、本編を知らない人にも読んでもらいたいので、本編のキャラの説明も投稿しようと思います。

本編を読んでいる人は読まなくて良いです。

これから本編同様によりしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6362y/>

有栖キャロの小学校物語

2011年11月22日14時39分発行